



中国語学短期留学の報告 —引率教員の目から—

尾上 兼英

昨年8月4日、中国語学科3年生38人と貿易学科2年生1人の計39人を連れて、山口教授と北京の中央民族学院へ4週間の語学研修に出発した。中国への語学研修は初めてではなく、これまで北京科技大学への個人としての短期留学の斡旋などはしていたが、中国語学科の教育の一環として企画された最初のことであり、40人近くの人数は初めての経験なので、報告する次第である。

受入校の選定は、たまたま私が88年9月から89年9月まで、北京日本学研究中心の日本側責任者として出向していたので、物色を依頼され、北京を中心に東北地区、江南地方の大学を調査し、打針した。それぞれに長短があり迷ったが、方言差の大きい中国では、折角習得したことが街へ出てすぐ通用しなければ、学生諸君の落胆が目に見えるし、初めての訪中という学生が多いことを思えば、やはり北京が最善と考え、北京大学始め諸大学を参観し、評判なども聞いて歩いた。その結果、こちらの条件に最も適切な対応が期待できるのは中央民族学院であるとの感触を得たので、中国語学科の同僚の判断を仰ぎ、決定した。

中央民族学院は、55を数える少数民族のリーダーを養成する大学で、各民族の文化が正当に評価され、漢語以外の言語に対する偏見のないところであり、漢字文化圏の東端に位置する日本人にとって違和感が少ないであろうというのも、選定理由の一つである。

研修は8月6日から31日、月一金の午前4時間、木の午後2時間補講、それ以外は自由時間、週末は北京周辺への小旅行3回(万里の長城、周口店など)京劇、雑技参観なども学院側が計画してくれた。自由時間は市内参観にあてたようで、学生諸君は結構“北京通”になったようである。しか

し、中国での生活は食事時間を中心に組まれており、時間外には自由に食事のできる場所は限られているので困ったようである。また、出発前から注意しておいたことであるが、油の多い食事で腹こわしをしたり、風邪をひいたりという程度の病人はかなり多かったようである。夏時間が採用されているので、朝は眠く、夕食後も太陽が輝いているので、日頃のリズムと合わず当惑したのではなかろうか。

89年6・4の後遺症を懸念する人もあったが、(事実、北京の人通りは目に見えて少なくなっていた。100万人いたといわれる浮動人口の大半が郷里に追い返されたためと聞いた)90年のアジア大会で警備は嚴重であり、治安については楽観していた。ただし交通規則が違うので、そのための事故と、タクシーがホテルでしかつかまらないので、門限までに全員帰ってこられるかを心配したが、杞憂に終わったのは、学生諸君の自覚によるところ大と確信した。

研修終了後の1週間、杭州、蘇州、上海へ参観旅行をした。中国語に自信をつけた学生は、修学旅行気分もあって、それぞれ羽を伸ばして楽しく過ごしたようである。ただ残念なことは、中国側も夏休みのため学生間の交流が思うようにできず、中国の表面だけかいなでの認識に終わったのではないかということである。何故自転車が多いか、生存競争さながらに他人を押しつけて恥じないバスの乗客、日本語で親切に説明してくれた老人、仏頂面に対応する店員など学生諸君のカルチャーショックを、フランクに話せる同年代の“朋友”ができれば、さらに成果があったらと思う。今後に期待したいことである。

神に選ばれたことば (1) ——アラビア語のあいさつ——

武内 道子

A: アッサラーム・アレイクム

B: ワ・アレイクム・アッサラーム

サウジアラビアの街角で、市場で、時と場所と相手を選ばず最もよく耳にするあいさつことばである。Aは先に呼びかける人専用、Bは受け応え専用句である。「アッサラーム」は「サラーム」(平和)に冠詞がついたもので、イスラームやモスラム(イスラム教徒)もサラームから派生している。「あなたに平和を」をいう意味で、「こんにちは」と同義と言ってよい。受ける方は、前と後をひっくり返す。「ワ」は接続詞である。「ハイヤカッラー」(あなたに神のあいさつがありますように)はもう少しだけけた表現で、これも「アッラー・ハイヤック」と返答する。

「お早よう」に相当する句も二種ある。「サバハ・アルヘル」と一方が言えば、「サバハ・アルヌル」と相手が返す。夜のあいさつは「メサ・アルヘル」に対して、「メサ・アルヌル」と返す。そうかと思うと、「マルハバ」(こんにちは)のお返しは、「マルハブテイン」となる。「マルハバ」に余分についた「エーン」は接辞で、双数を表わす。従って、「こんにちは、こんにちは」ということになるのか。

「ご機嫌いかが?」に当たる一般的な表現は「ケイファーラック」または「シュローンナック」であるが、その応え方がふるっている。「元気です」とあっさり言わない。「アルハムドリッラー・タイプ」という工合に、アッラーの神さまが登場して「お蔭さまで」の意の長い句のあとに、「タイプ」(元気です)が続く。あいさつの中で必ず家族(子どものことが多く、親のことも尋ねるが、奥さんのことは聞いてはいけないことになっている)のことを尋ねる。一人一人に、「元気か」に続いて「アッラーのお加護がありますように」という句が続く。

私がサウジアラビアで知りあったアラブ人は、誰もがアラビア語を誇りにしているように見受けた。コラーンを聞いても、その単調さばかりが耳につき、優雅とも美しいとも思わなかったが、彼らの日常のやりとりは、ちょうど七五調で話しているような、リズムカルな面があると思った。市場で、民族衣装の白装束姿の店員が、入ってきた友人を認めるや、レジの手を休め、抱きあい、頬すり寄せ、大声であいさつを交わす。二人の間の息もつかせぬやりとりを受けては返し、返しては受けるかけあい、客を待たせていることなどまるで頓着なく、延々と続く勢いに、腹も立てず、聞きほれた。

相手の言うところを入れ替えたり、つけ加えたり、変形したりしながら、バレーボールのトスの如く続く。相手の言った通りに言い返すのは失礼だといわんばかりである。きまり文句に加えて、ことわざ、格言もひんぱんに交えながら、自分の方から止めたくないという必死の思い(?)に支えられているかのようである。

そこには、会う人は誰でも友人であることを示したい気持ちと、礼節を省略して相手の気を悪くさせてはという思いがあるように察せられる。アメリカ人は、すれ違いざま、たとえ初めての人でも、片手をあげるかウィンクをして“Hi'how are you?”とくる。日本人と出くわすと、「暑いですな」、「今日は湿度が高いわね」という工合に、時候あいさつことばとなる。遊牧民としての、西部開拓者としての農耕民族としての面目、それぞれ躍如である。

その国の人と、彼らのあいさつことばのひとつでも交わすと、彼らの国民性の一端を垣間みる思いがして愉快である。

童話の〈語り〉の研究方法を求めて

古岩井嘉蓉子

日本文化とは何か又は、日本人、日本語とは何かといった論文や記事が最近多く出回っている。どの説も筆者にとっては、興味ある示唆を与えてくれるが、中でも松谷みよ子氏が朝日新聞（平成元年10月13日夕刊）で〈語り〉と〈話すこと〉の違いを猫の湯治にまつわる話を例にとりながら簡単に説明している。松谷氏は「話すうちにふくらんで、語りになるのでは」と、書きしるしている。話しの内容に重みを与えるのは、語り手（作者）の視点や語りの場すなわち語り手と聞き手（読者）が一体となって作った一つの共通世界であるということであろう。単に物語の内容や出来事の筋や怪奇な事実そして登場人物の系図や経歴を伝えるだけであれば、新聞、ラジオ、テレビのニュースと何ら変わるところはないであろう。〈語り〉（narrative fiction）といわれるものにまで昇華させ、聞き手に忘れることのできないような印象を与えることのできるものでなければならないはずである。一体、何が又どのような要素が聞き手にとって〈語り〉（narrative fiction）となるのであろうか？それは、語り手と聞き手の心が通い合わなければならない。それでは、童話の作者は、どのような手段・方法をもって心の通い合う〈語り〉（narrative fiction）を創造するのかを日本の子供向けの童話を中心に整理してみることができよう。外国語で書かれた童話を日本語に子供向けの〈語り〉（narrative fiction）に訳する時、どのような工夫と創造が加えられなければならないか。日本語の童話を書くための工夫と創造力とは何か？それは日本語に対する日本人の美的心理的感覚によって特徴づけられるのではないかと思われる。慣習を人間の潜在的文化的創造者と考えると、日本人の〈語り〉（narrative fiction）の中には、長い間の中に、時間的視点、心理的視点という現象が〈語り〉を発展させてきたといえる。特

に時間的視点（時制の交替）と美的心理的視点とは互いに絡み合って筋の発展を促している。〈語り〉の研究についても叙述の基点となる美的心理的感覚の視点から日本語の童話の〈語り〉にみられる時制の交替を整理してみることができよう。従来、言語学が厳密な方法をもって、言葉という立場から種々な分析を成し遂げてきたが、童話の〈語り〉の中の言語が、いかに物語の筋の構成に係わっているかという問題は、多分詩学（Poetics）の範疇に入るのであろう。作者や語り手の特徴を考慮しながら組織的に語り（narrative fiction）を整理してみることが、いいかえれば体系的な文学研究の方法といえる。〈語り〉（narrative fiction）は三つの要素である‘story’、‘text’そして‘narration’から出来上っていることを認識すると、言語を越えたレベルで研究方法を模索してみる必要があるように思われる。

翻訳／誤訳 (3)

倉田 清

文学作品、ことに、詩を翻訳するのがきわめて難しいことは、誰でも知っている。言語構造のまったくちがう英語やフランス語から、日本語のリズムや語感を考慮しながら訳すわけで、とにかく、原語の大きな理解力と、日本語の卓越した表現力が必要である。

まず、名訳と言われている例を挙げてみよう。原詩はフランス象徴詩の傑作の一つで、日本でもよく知られているヴェルレーヌ (Paul Verlaine, 1844-1896) の「秋の歌」(Chanson d'automne) の上田 敏と堀口 大学の訳である。

原詩は、次のとおりである。

Chanson d'automne

Les sanglots longs
Des violons
De l'automne
Blessent mon cœur
D'une langueur
Monotone.

Tout suffocant
Et blême, quand
Sonne l'heure.
Je me souviens
Des jours anciens
Et je pleure.

Et je m'en vais
Au vent mauvais
Qui m'emporte
Deçà, delà,
Pareil à la
Feuille morte.

これに対して、上田 敏は、明治38年に『海潮音』で、また、堀口 大学は、大正14年に『月下の一群』で、それぞれ特異な優れた訳を示している。

落 葉
上田 敏

秋の日の
ギオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かえて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉かな。

秋の歌
堀口 大学

秋の
ヴィオロンの
節ながき啜泣
もの憂き哀みに
わが魂を
痛ましむ。

時の鐘
鳴りも出づれば
せつなくも胸せまり
思い出づる
わが来し方に
涙は湧く。

落葉ならね
身をば遣る
われも、
かなたこなた
吹きまくれ
逆風よ。

原詩は、各行4音節だが、上田 敏は5音節で、堀口大学は3、5、7音節で訳している。訳詩の中でアンダーラインを施した箇所は原詩にはないが、前者は古典的で静穏であり、後者はダイナミックである。両者とも、大自然の悲哀と内的宇宙の

悲哀との照応、宇宙の現実と魂の現実の呼応、つまり、「万物照応」(Correspondances)の世界を美しい日本語で表現している。このような詩編の訳は、ある意味で、創作であろう。

シュールレアリストであったポール・エリュアール (Paul Eluard, 1895-1952) は、第二次大戦中、ナチス・ドイツのフランス占領下にあつて、愛する女性に捧げるべく詩を書いたが、その題に彼女の名ではなく、祖国の中の異国で死の苦しみに耐えているすべてのフランス人が何を最も待ち望んでいるかを考え、題に“自由”を選んだのである。それによって、個人的な愛が普遍的な愛と結びつき、叙情詩に叙事的な要素が加わることになった。フランスの民衆はナチの暴力による非情な状況にあつても、女性への愛、人間への愛が永遠に途絶えることのないことを証明し、暗闇の時代に“自由”という一つの語(ことば)にすべての希望を託して闘ったのである。

次の引用は、その「自由」(Liberté)と題された有名な詩編の中の二つの詩節である。

Sur chaque bouffée d'aurore
Sur la mer sur les bateaux
Sur la montagne démente
J'écris ton nom

Sur la mousse des nuages
Sur les sueurs de l'orage
Sur la pluie épaisse et fade
J'écris ton nom

ある大学教授の訳を挙げてみよう。

夜明けの風がそよぐ その度ごとに
海に 船に
逆上した山に
私はきみの名を記す

わき立つ雲の泡に
嵐のしとどな汗に
厚く色褪せた雨に
私はきみの名を記す

シュールレアリストの詩ではあるが、イメージはそれほど複雑でも、難解でもないと思う。

上の訳文の「風がそよぐ」、「しとどな」は余計であり、「逆上した」、「雲の泡」、「嵐のしとどな汗」、「色褪せた雨」などの訳語は、直訳に過ぎるのではないか。「逆上した山」ははたして誰にでも理解できるであろうか。また、「私」に対しては、ふつう「あなた」であつて、「きみ」に対しては、「ぼく」ではないのか。

次は、筆者の訳である。

曙の ひとつひとつの息吹きの上に
海の上に 船の上に
そびえ立つ山の上に
僕は書く 君の名を

泡立つ雲の上に
汗のように 吹き出す嵐の上に
垂れこめて 味気のない雨の上に
僕は書く 君の名を

(筆者は外国語学部教授)

〈報告〉

- (1) 第1回英語教育研究大会 (1990年10月27日)
- (2) 連続公開講演会 (1990年12月7, 13, 14, 15日)

伊藤 克敏

本年度の新しいプロジェクトとして、上記二つの会が催された。

(1)は県下中高英語教育研究部会の協賛も得、約100名の参加者があり、熱気溢れる大会となった。

先ず、筆者による「コミュニケーション能力を高める指導のあり方」、次いでR. ザブスラック専任講師による「Some New Ideas on Classroom Activities」と題する二つの講演がなされた。前者は日米伝達方略の相違を比較し、その指導法について述べた。後者は連想を利用し、語彙や表現力を伸ばすゲームの仕方を披露した。「中学校、高等学校、大学の英語教育の問題点」と題するシンポジウムでは、先ず松山正男氏(神奈川大学)が大学英語教育学会の調査を踏まえ、大学英語の選択化、入試廃止の必要性、教員の海外研修、クラスサイズの縮小等についての提案をした。松井弘氏(横浜市立瀬谷中学校)は英語教師ができるだけ英語を使い、生徒の言語経験を豊かにする必要性を説いた。馬守正夫氏(横浜市立港南中学校)はAETとのteam teachingを活用し、場面に基づいた対話練習の仕方を紹介した。臼井良雄氏(県立保土ヶ谷高校)は日本文化や民族性について教科書でもっと扱う必要性、また、教師の海外研修の重要性を力説した。小嶋勲夫氏(県立有馬高校)はAETをtopic writing, free writing, 等'pleasure writing'に活用すべきである、と主張した。

(2)では12月7日(金)午後、Joseph F. Kess教授(カナダ、ヴィクトリア大学)による「The Developing History of Psycholinguistics」, 「Ambiguity in Natural Language」という二つの講演が行われた。先ず、言語学史の発展を比喻を用いて三つの時期に分けて説明し、続いて、心理言語学の発展を四つの時期に区分けした。1951~59年までの「形成期」を行動主義と特徴づけた。次いで、「言語期」

では変形生成文法によることばの規則性と生成、言語の生得性等が中心課題となっており、「認知期」「認知科学」と進む。最近では言語と認知の関係が焦点化して来ている、としている。続く「自然英語の曖昧性」についての講演では、単語、文法、比喩レベルの曖昧性を指摘し、後半でその応用として、広告における曖昧性の利用について多くの実例を挙げ、興味深い話がなされた。

Craig Chaudron 博士の三日間にわたる連続講演は、夕方6時から8時までという時間帯で、外部からも多くの聴講者があり、活発な質問や議論が展開された。

ハワイ大学の第二言語研究班は、1960年代から注目されて来たクラッシュェン(S. Krashen)の「入力仮説」(Input Hypothesis)に批判的な目を向け、教室内での活動のあり方と研究方法について、新しい知見を発表しつつある。クラッシュェン理論の批判として、(1)output practiceの効用性、(2)文法項目習得順序、(3)文法的説明の効果、(4)誤用訂正のあり方、等が挙げられる。(1)では特に、writingによる文法能力錬磨の必要性を強調している。(2)では、input frequencyや年齢による変化もみられ、今後の研究課題である、とする。(3)では、言い換えとか同意語、反意語の提示、例文の活用等による説明は効果的である、とし、(4)では、誤用訂正もやり方によっては効果を発揮する、としている。